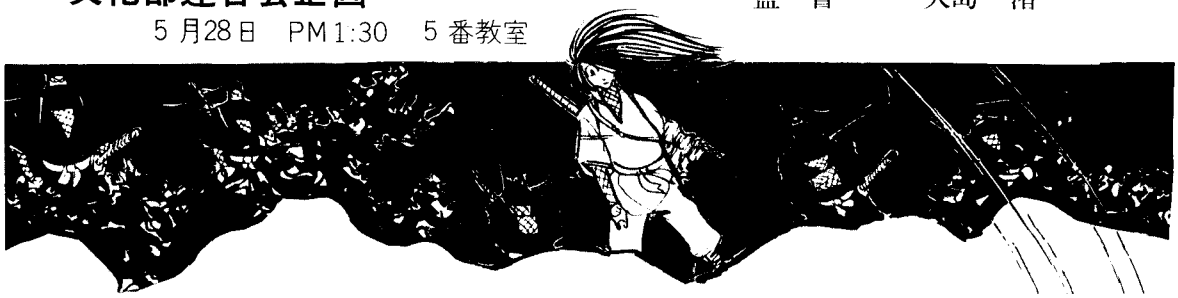
—その生と死、影丸は今こそ甦えるか—

長編フィルム劇画 「忍者武芸帳」

原作・原画　白土三平
監　督　　大島　渚

文化部連合会企画
5月28日　PM1:30　5番教室



影丸は死んだ。五体を八ツ裂きにされて。その首は不敵な笑いを虚空に響かせながら晒された。だが，現代の英雄を夢見た男の首は笑う事もなく，また晒されることも無いままに手厚く葬られる。影丸は英雄ではない。過去においても，また現在においても。影丸は辞世の歌など残さない。遠くから来て，遠くへ行くだけだ。と言って死ぬ。影丸自身は死ぬとは思っていない。影丸は死んで，なお死なない。地を這い天を馳けて，影丸は生き続けた。影丸はスターでは無く，英雄でもなく，首領でもない。影丸は具象であり，主体であり，存在なのだ。影丸には歌はない，墓にそっと花を供る者もない。

「影丸が甦った」という，うわさに人は恐怖した。各所に火の手があがり，その黒い炎を通して見つめる眼の中に影丸がいたと言う。アメーバが触手をのばすように，生を求めて動めく一群の人々の中に影丸がいたと言う。だが，その真偽は誰にも判らない。しかし，その影丸はあの信長の天下統一の大事業の前に大きく立ちはだかった全国の一揆の群れに必ず見られた影丸ではなく，彼が予言した第二・第三の影丸であることだけは確かだろう。

影丸は恐怖のシンボル。恐怖の雨に眠る時，心の嵐が鳴き叫ぶ。ほっと安堵の吐息が。その瞬間，恐怖の怨念に化身する。耐える事を自己の背後のバリケードに。重い，なにか，えたいのしれない重い物を背負っているような気持だ。社会存在としての自負は恐怖そのものだ。社会の秩序は人間愛でささえられているのか。ノン　ノン　ノン　恐怖による維持なのだ。法や掟という名の『秩序』の番人。恐怖から発した法や掟が，人そのものを乗り越える時，自立する。法や掟は人間そのものが無関心になる事によって，成立するのか。ノン　ノン　ノン　恐怖による虚構なのだ。支配のテクニックは恐怖。法や掟に身をおく時，自己放棄が始まる。法や掟を目的化すれば，人間存在の根本である人権まで規定される。法や掟に空洞化された人権の復活を影丸に見る。個に凝縮された農民が，恐怖の解放を目ざして立ち上った。恐怖を作る枠を突破せよ。土地と生活を守る。生と死をただよう。パトスが甦えるのだ。ほとばしり出る力，それが凝血された個を普遍化するのだ。法や掟に安住した身からは，共同体はできない。それは虚構。その枠を破る所から恐怖は解放される。無限の解放に。ほらそこに第二・第三の影丸がいる。

祝　和　泉　祭

アルバイト歓迎

ITO 伊藤製パン

墨田区亀沢1－22－9
Tel (622) 4121